

文学館だより

令和5年12月1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高 第92号

第3回 伊藤一彦短歌実作講座 今年度は終了いたしました

日向市、都農町、門川町にお住まいの短歌愛好者が集う「伊藤一彦短歌実作講座」。今年度最後の講座が開催された。

今もなお戦禍の続くウクライナ我あんのんとラグビー観ており

- 評 作者の実感が表現されていて、このままで良い。
「ラグビー観ており」が具体的で良い。
我々は何もできない、詠うことくらいしかできない。



最初はグー息の合いたる姉妹かな残りのメロン決着つかず

- 評 ユーモアがあつてうまい歌である。

気づきとは傷つきとも言ふらし自分探しは だから苦しき

- 評 「気づきとは傷つきとも言ふらし」の発想が深い。
「言ふらし」は断定しない漠然とした言い方。
結句を強調したいからあえて一字空けている。



「伊藤一彦短歌実作講座」（日向若山牧水顕彰会主催）はこれまで18年の歴史を刻んできた。伊藤先生を慕い、短歌を愛する者たちが集い、自作短歌を鑑賞し合う。今から19年目が待ち遠しい。

牧水没後95年特別企画「若き牧水から現代へのメッセージ」より

今年9月、公開講座特別企画「若き牧水から現代へのメッセージ」が宮崎大学で開かれた。我らが文学館館長伊藤一彦氏、宮崎大学教育学部教授中村佳文氏、宮崎市在住の若手歌人、狩峰隆希氏がトークを繰り広げた。20代の若手歌人が若き牧水をどうとらえているのか、注目したい。

どこから来てどこへ行くのか 一若き牧水の歌

かりみねりゅうき
狩峰 隆希

私は高校時代、牧水・短歌甲子園出場をきっかけに牧水と出会い、そこで牧水の存在の大きさを目のあたりにした。県内で開催された牧水のイベントにも何度も足を運んでおり、その中には伊藤一彦先生が登壇されているものもあった。そんな私だが、じつはこれまで牧水の歌を面と向かって読んだことはなかった。（略）

おもひやるかのうす青き峠のおくにわれのうまれし朝のさびしさ
生くといふ否むべからぬちからよりのがれて恋にすがらむとしき
はつとしてわれに返れば満目の冬草山をわが歩み居り

『海の聲』
『独り歌へる』
『路上』

「われのうまれし朝のさびしさ」とは何なのか。立ち止まって考えさせられる表現である。私は、自分がこの世に生をうけたことのさびしさ、つまり人間の原初的なさびしさを訴えかけているのではないかと読んだ。上句は地名などの固有名詞を用いず、和語のやわらかなしらべで描写しており、まさに自然界から産み落とされた感じがする。次の歌は、「生く（生きること）」とは「否むべからぬ（拒否できない）ちから」をもつという見方にはっとさせられる。それに逃れて恋をしたこともあったという歌であるが、一見後ろ向きのようで、かえって生きることへの強いエネルギーを感じさせる。牧水の絶対的な生の肯定感が裏打ちされているように思う。

「はつとしてわれに返る」と、見渡す限りの冬の草山のなかを歩いているところだった。浅間山を旅した折の歌だが、自分が何のために歩いているかわからなくなるという感覚が旅人の体感としてとてもリアル。「はつとしてわれに返れば」という口語の調子も、ふと緊張が解けた感じが出ていて効果的である。

さて、若き牧水からどのような現代へのメッセージを読みとることができるか。私は、自分がどこから来てどこへ向かうのか、という問いに対して、牧水の歌や生き方から学ぶべきものがあるような気がする。両親、あるいは故郷の風土や伝承を自身のルーツとして歌に落とし込んでいった牧水。そしてまた、「あくがれ」の精神から、みずからの行くべき先を求めつけたこと。そこには、自分がどこから来てどこへ向かうのかという意識が働いていたのではないか。

私の場合だと、自分の好きな歌人の作風がどのように確立されたか辿っていくなかで、戦後短歌や前衛短歌に目を配ることがあり、翻って、その時代の歌と自分たちのころの歌とのつながりを考えることがある。また今

年、戦後の短歌同人誌「灰皿」を取り上げて評論を書いたが、「灰皿」の提起する「戦前感覚の復活」から、2023年現在の戦前感覚に思いをはせることがあった。自分たちはどういう道を辿り、これからどう進むのか。ときに過去のことを探りながら考えていくことは、とても有意義なことである。牧水の歌や生き方は、そのことを考えるうえで示唆に富むべきもののように思う。

このメッセージを現代に汲み取りつつ、もう一つ胸にとめておきたいのが、若き牧水が当時自分の生涯をどのように捉えていたかということ。第三歌集『別離』の自序には「そして丁度昨年は人生の半ばといふ二十五歳であつた」とあり、同じく現在二十五歳の私からみて、この言葉は重く響いてくる。人生の半ばを生きている.....平均寿命がいまよりずっと短い時代にあって、牧水は限られたいまを生きようとしていたということを、牧水の歌を読むときには念頭に置きたく思う。

狩峰 隆希 第6回牧水・短歌甲子園優勝。牧水・短歌甲子園 OBOG 会「みなど」副会長。
宮崎市在住。短歌結社「まひる野」に所属する25歳の若手歌人。

坪谷っ子たち、ありがとう (^▽^)

12月1日（金）、牧水母校 日向市立坪谷小学校（全校児童16名）の皆さん、牧生家清掃をしてくださいました。恒例とはいえ、寒風の中の清掃作業、ありがとうございました。今回も、尾鈴山を仰いで歌う牧水の歌齊唱、列を乱さず学校へ戻る後ろ姿を見ることができ、古き良き伝統を覗かせていただきました。

坪谷っ子たち、ありがとう。



12月の予定

- **会期延長** 熱いご要望にお応えし
企画展「伊藤一彦展」を12月24日（日）まで延長いたします。
よって、12月開催予定企画展「若山牧水賞」は1月4日（木）からの開催となります。
第28回若山牧水賞受賞者 永田 紅（こう）氏紹介並びに歴代受賞者が一挙に並びます。
- 第13回 青の國若山牧水短歌大会表彰式
12月17日（日）13:30～日向市中央公民館 入場無料です
「行ってみろかい」と、ご近所みなさんでお越しください。
- 12月28日（木）まで開館。29日（金）から1月3日（水）まで休館です。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

はつとしてわれに返れば満目の冬草山をわが歩み居り

はつとして われにかえれば まんもくの ふゆくさやまを わがあゆみおり

即訳

何か考え事をしながら山の中を歩いていて、はつとわれに返って気がついたら、私は、見渡す限りの寂しい冬枯れの草の山を歩いていた。

解説

小諸（こもろ）に来たときはまだ秋の初めだったが、すでに11月、あたりは冬草山である。「はつとしてわれに返れば」は、信州の自然の中で、癒されて過ごすうちに、東京のことをすっかり忘れて滞在していたことも意味しているかのようだ。園田小枝子との恋愛に苦しみ、苦しみを忘れるために飲み続けた酒のために体調を崩した牧水は、病気治療のため、約2ヶ月以上小諸に滞在する。この歌は明治43年、牧水25歳の時に詠まれている。名歌即訳『若山牧水』大谷和子著 参照
この歌は、前述、宮崎の若手歌人狩峰隆希氏が引いた歌である。